抽象的人工物説と集合論を用いた、フィクションのキャラクター

一の存在論的地位の考察

木原 陸 (Riku Kihara)

大阪大学人間科学研究科

固有名の意味論的値をその指示対象とするミル流の直接指示論では、存在しないものを指示するように思われる名辞、つまり空名が問題となる。例えば、シャーロックホームズはフィクションの人物であり、存在しないため、「シャーロックホームズは数多くの事件を解決した」という文に現れる固有名「シャーロックホームズ」は何も指示していない。すると、この文は何ら意味内容を持たないか、偽であるはずだが、これは直観に反する。なお、「シャーロックホームズ」のような固有名はフィクション名と呼ばれる。

直接指示論の立場でフィクション名を扱うにあたり、抽象的人工物説という解決策が提示されている（トマソン 1999 など）。この解決策によれば、「シャーロックホームズ」のようなフィクション名は、現実に存在するキャラクターを指示するため、何も指示していないことにはならない。また、フィクション名が空名でなくなるため、それを含む文を有意味に解釈できるなどの利点がある。しかしながら、抽象的人工物説では、文中に現れるフィクション名がキャラクターを指示すると決めてしまった以上、「シャーロックホームズは存在しない」のような、直観では真だと判断される否定単称存在言明をうまく扱うことができなくなる。現実に存在するキャラクターが存在しない、というのは明らかに偽であるからだ。

この直観に反する帰結を解消するにあたり、トマソン（1999, 2003）やサルモン（1998）やプレデリ（2002）が既に各々の解決策を提示しているが、いずれも問題含みのものとなっている（フレンド 2007; 藤川 2008）。特に、それらに共通する問題として、フィクションのキャラクター以外の多くのモノに対しても、抽象的な人工物として認めてしまうリスクが指摘されている。例えば、フランスの天文学者ルヴェリエが予言した天体であるヴァルカンは、後の研究によるとルヴェリエの理論が間違っており、実際には存在しないモノであった。この場合、固有名「ヴァルカン」は何も指示していない。しかし、「ヴァルカンはルヴェリエが予言した惑星だ」のような文が有意味であることを説明するためには、「ヴァルカン」が何かを指示していなければならない。とはいえ、ヴァルカンはやはり存在していないのだから、ホームズなどと同様に、「ヴァルカン」がルヴェリエの考えたヴァルカンという存在するキャラクターを指示すると考えることは矛盾しているように思われるし、ヴァルカンはホームズのようなフィクションのキャラクターではないという直観とも反する。

本発表では、存在とは集合とのメンバーシップ関係であるという、Yagisawa

(2014) の提案した集合論による存在の分析を利用する。この分析を用いると、ホームズはフィクションのキャラクターの集合に含まれる一方で、現実世界の人間の集合には含まれない。つまり、「シャーロックホームズは存在しない」の真偽は、文中の「存在しない」がどの集合と相対的なものであるかによって変わるため、シャーロックホームズというキャラクターの存在を認めつつ、現実の人間の集合と相対的な意味で「シャーロックホームズは存在しない」が真であると主張することができる。また、ヴァルカンは可能世界のモノの集合と相対的に存在すると考えることで、シャーロックホームズとヴァルカンの存在論的地位の違いを明白にすることも可能となる。

また、集合論による存在分析によれば、あらゆる意味で存在しないモノはあらゆる集合に含まれず、いかなる性質をも持たないため、固有のモノにはなり得ないことから、固有名でありかつ空名であるような名辞が存在しないことを示すことができる。これにより、直接指示論における空名の問題は無効化される。

最後に、本発表に対し予想される二つの反論に応答する。一つ目は、「全てのモノが『存在する』ことになってもよいのか」というものだ。ここで、文中の「存在する」は現実世界の具体的なモノの集合と相対的に理解されていることに注意すべきであり、シャーロックホームズやヴァルカンが現実世界の具体的なモノの集合に含まれないことを考えれば、この反論を退けられる。二つ目は、シャーロックホームズが抽象的な人工物である以上、「シャーロックホームズは人間だ」のような言明が偽になるのではないか、というものだ。この問題の解決にあたって、トマソン (1999) のようにフリを用いることが考えられるが、抽象的な人工物が人間であるという奇妙なフリをしなければならぬという欠点があるため、本発表では「設定」という概念を提案する。例えば、「シャーロックホームズは人間だ」は、シャーロックホームズというキャラクターが「人間である」という設定を持つとして理解され、読者はそのような人物を想像する。

参考文献

- 藤川直也、2008、「直接指示論とフィクションにおける名前」『哲学論叢』35: 177-188
- Friend, S., 2007, "Fictional Characters", *Philosophy Compass*, 2(2): 141-56
- Predelli, S., 2002, "Holmes' and Holmes: A Millian Analysis of Names from Fiction", *Dialectica*, 56(3): 261-79
- Salmon, N., 1998, "Nonexistence", *NOUS*, 32 :3, 277-319
- Yagisawa, T., 2014, "Deflationary Existence", *Annals of the Japan Association for Philosophy of Science*, 22: 1-16
- Thomasson, Amie L., 1999, *Fiction and Metaphysics*. New York: Cambridge University Press.
- , 2003, "Speaking of Fictional Characters", *Dialectica*, 57(2): 99-254